

五月雨は夏の季語です。五月に降る雨のことですが、現在の五月ではありません。季語は旧暦をもとにしています。現在の暦と旧暦は約一ヶ月のずれがありますので、旧暦の五月は、現在の六月頃になります。したがって五月雨は、梅雨の雨になります。

五月雨の季語で、まず思い出すのは、松尾芭蕉の句でしょう。

「五月雨を あつめて早し 最上川」

この句の五月雨はどんな雨でしょうか。現在の五月に時々降るような雨であったら、最上川の水量が増し、川の流れがはやくなるには、足りないかも知れません。やはりこの「五月雨」は、雨量が増す梅雨の雨ではないでしょうか。

五月雨の、一粒一粒はとても小さいものですが、梅雨の時節その一つ一つがたくさん集まると、最上川の水量を多くし、流れを早くさせていきます。

「精進」という仏教の言葉があります。たゆまず、常に修行を続けていくことです。一日一日の精進は、たとえささやかなものであっても、その力が積み重なっていくと、大きな力となり、私たちを変えていくことでしょう。

五月雨の一粒一粒が、最上川を「早く」させていくことと重なって見えてきます。

その川の流れは、すべては移り変わっていくという、諸行無常のことわりを、感じさせます。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

「ゆく河の流れは絶えずして、しかも もとの水にあらず」

という鴨長明の『方丈記』の最初の一節があります。

鴨長明は河の流れを眺め、諸行無常を感じ取ったのでしょうか。岸から河を眺める、つまり、河と自分の間に距離がある無常の感じ方を、無常感と言いたいと思います。感情の「感」です。無常と自分を切り離す態度といえます。そこには「ああ、無常とはなんとはいかないことか」といった嘆きも含まれるでしょう。

対して、自分自身も無常のことわりと無縁ではない、自分も常に変わり続け、限りあるいのちを生きる存在なのだ、と認識する態度があります。これを、観察するの「観」を用いる、無常観と表したいと思います。河の流れと自分は同じ、すなわち無常である自らのいのちを引き受け、主体的に生きていく態度であるといえます。

さて、芭蕉は最上川の流れを、岸から眺めていたのでしょうか。

実は、舟で最上川を下っていたのです。現在の山形県の^{おおいしだまち}大石田町にあった船着き場から乗ったそうです。五月雨で増水した最上川の流れは激しいものでした。

「水みなぎつて舟あやうし」という記述が『おくの細道』にあります。「五月雨を集めて早し」の「早し」が実感をもって伝わってきます。

芭蕉は自分自身も無常のことわりと無縁ではない「無常観」をもってこの句を詠んだのではないのでしょうか。「精進」と「無常観」、五月雨つまり梅雨の季節、思いをはせていただければと思います。

— 終 —